

勤に御座候

とある。上級生の大半は職業に就いていたので、独歩より年上のものもかなりあったであらう。これで学館の様子がよくわかる。

独歩は、詩人として生き、詩人として天職を完うしようとする生来の希望は、まことに旺盛なものであった。

七日 六日は去りて七日は来り、七日も亦將に去らんとす。

本日午前収ニと共に郊外に出て金比羅山に登る。此の山は佐伯所の南に當りて兀立する山なり。眺望佳なり。

金比羅山とは、久部の煙草山である。ひまさえおれば、あちこちの山野を跋涉した独歩には、先ず手初めといふところであらう。

独歩兄弟は、六日に芳島の月本旅人宿へ転宿した。今の幹線道路は、昔は川であった。広小路から芳島に渡るのに、踏木橋という橋があった。この宿屋は、その踏木橋の橋元にあった。今はその面影は全くない。(つづく)

紹介

「佐伯と國木田独歩」について

編集 子

今から八十五年前の明治二十六年の夏、独歩はこの草深い田舎町の佐伯にやゝ来て、正味は僅か十か月しか居なかつたのに、まことに巨きな足跡を佐伯に残した。うちめぐらす佐伯の山々、清らかに流れる番匠川、そして桃源境のようなあちこちの村里、それらを、詩情豊

かな数々の名文章で、広く天下に紹介した。そして今も今後も佐伯の良さを変らざるに賛美しつづけるものが、外にあるであらうか。

しかし、独歩についての皆さんの理解は、あるいは観念的なものではあるまいか。明治の中葉の社会背景、独歩の文学やその私生活に至るまで、私どもはどれだけの認識をもっているだろうか。

わが佐伯史談会は、多年独歩の文学を愛読し、その生活の足跡をたどつたりした。また先年、佐伯ロイヤリークラブは巨費を投じて、見事な「城山」の詩碑を三の丸上段に建設した。そして去る六月二十三日の「独歩忌」には、とたえようとしていた「佐伯独歩会」が再興され、その組織は成長・充実の一途をたどっている。まさに上げ潮ムードである。

あたかもよし、この時に、佐伯に於ける独歩研究の第一人者、山内武藏氏が多年のうんちくを傾けて、独歩に関する文献を集め、資料を詳細に究めつくし、ここはまとめて、「佐伯と國木田独歩」と題して寄稿して下さることになつた。何たる仕合せであらう。

原稿はすでに大半は頂いているが、尚進行中で、「歎かざるの記」をはじめとし、「源おじ」、「春の鳥」、「鹿脊」、「豊後の國佐伯」など、すべての作品を精密に考証して、佐伯に於ける独歩研究の、決定的なものと成りようである。私は大きな期待をもち、この「佐伯史談」誌上に連載を一つづけようとしている。少なくとも向こう三年はつづくことにならう。

「佐伯と國木田独歩」というタイトルは、どこかで見かけたとお思ひの方もあるう。それは数年前出版発行された「佐伯市史」の中、「佐伯人物志」の次に、この標

題で出ている。その執筆者は、実はこの山内氏である。

「人生は短かい。しかし芸術は長い」といわれる。独歩の文学は、佐伯というすぐれた自然環境の中で成育し、明治時代を代表する自然主義文学者として開花した。その作品の中に、佐伯の山野と純真な人生をえがき、つくしているが、その独歩の文学の眞面目を知るのは、これからはあるまいか。山内氏のこれからの連載は、必ずや会員皆さんに、独歩理解のこよない手引きとなることである。(独歩の文学は、佐伯の宝である。)

佐伯市は、その発行する印刷物や観光パンフレットに、従来よく岡本田独歩の文学作品や、下宿先や文学作品にあらわれる自然・風物の写真などをとりあげている。それはよい。そしてそれは今後と同様であらう。

写真に写しをとり、作品をとりあげたり、それは無料である。だからと言って粗雑・軽率な扱いは困る。どうかこの山内氏の評論が正しく受けとめられ、その理解の上には立って活用してもらいたい。

同様なことが、会員や一般読者に対しても言える。私は御土の文学として、独歩の文学を正しく受けとめ、ふるさと佐伯の山野を、美しい自然と地域の姿を、この上とも追求しようではないか。(おあり)

(付) 佐伯独歩会の会員へ

山内氏のこの文章は、これから長くつづく。史談会員で独歩会にはいっている、いわゆる両道かけておられる方はよいとして、独歩会だけの会員は、この際史談会の方に加入されてはどうかと思う。残部少々あり、皆さんからおすすめになっています。

各地便り

千葉市より「房総の書芸展」など

会員 小野 盛 雄

(八月三十一日)はがき)

暑さの連続数日、東京・千葉は水不足で制限されていますが、ここでは生活用水に今のところ及んでいませんが、降雨を待望しています。(中略)

昨日は、県立美術館へ出かけました。館内は冷房され、快適です。「房総の書芸展」として、江戸から明治にかけての書家・学者・文人の書が展示されていますが、利説すらもできず、ただ目で見ると面白いです。

小説「野菊の墓」の著者、伊藤左千夫(大正二年没)の青簡がありました。内容は、金百圓の借金依頼ですが、人間味あふれるようなところに興味をもって見ました。

先日、「日本の仏像」という本で、

「日羅は肥後の東北の国造(くわのみやつこ)阿利斯登(ありしと)の子であり、賢くして勇有り。百済王につかえていた。任那の復興を計った敏達天皇は、日羅を召還し、その献策を聞いた。」との文を見ました。

大野・直入郡方面で、日羅伝説云々は、耳にしたことがありましたが、日羅とは、実在の人であったのでしょうか。

ご自愛を祈ります。(下略)

(千葉市高洲 21613142)

年輪をかぞえるのは秋の水
法師殿 余を後日ぞ 櫻木氏